

RELEASE THE SPYCE: ツ  
キカゲアゲイン

Lycka

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

初めましての方は初めまして。

去年程から書き始めた新参加者です。

こちらは完全に思いつきで書き始めた作品になります。

にわか、誤字脱字その他諸々はご容赦下さい。

感想、評価等下さると主は大喜びします。

# 目次

S P Y C E	4 # 絢辻流		61
S P Y C E	3 # 記憶		42
S P Y C E	2 # 邂逅		24
S P Y C E	1 # ソラサキ始動		1



## SPYCE 1#ソラサキ始動

曰く、この街には悪の組織が存在する。

「本当にこれで良かったの？」

曰く、その悪の組織に対抗する正義の味方が存在する。

「ああ、あとは頼んだぞ……半蔵」

これは、そんな悪の組織と正義の味方のお伽話。

「お母さん夜景が綺麗だよ！」

「本当に綺麗ね」

私はこの街が好きだ。

「……………あれ？」

お母さんも大好きだし商店街の人達も明るく接してくれるから大好きだ。

「どうしたのモモ？」

「いや、今あそこに人影が見えた気がするの」

こんなにも景色も綺麗だし他にも良いところがいっぱいある。

「本職は事件の匂いを感じます！」

「あら、お父さんそつくりね」

もう一度、何度でも言う。私はそんな空崎が大好きだ。

く翌朝く

「お母さんおはよー！」

私の名前は源モモ。ここ空崎市に住む現在高校2年生！私が通ってるのは近く空崎高校というところ。2年生になったんだがら友達いっぱい作るぞ！

「じゃあ行つてきますー！」

「気をつけるのよー」

と、意気込んだのは良いもの……

「うう、全然話しかけられない……」

学校に着いてからまだ一言も喋ってないや。クラスみんなは他の人とワイワイ話してて楽しそうなの！これじゃあ去年と同じになっちゃおうよー！



「よっす」

「ゆ、結愛〜!」

「モモちは友達出来たの〜?」

この子は畠山結愛。去年の1年生の時に同じクラスだった子。去年は結愛と一緒に沢山遊んだり出来たけど今年は違うクラス……。だからお互い頑張ろうって言ったのに私の方がダメダメだった。

「この状況見て察してよ!」

「あはは、モモちは相変わらずだなあ」

やっぱり結愛と話していると落ち着くなあ。この匂いは……。結愛シャンプー変えたな? 今までではスッキリタイプのやつだったのに、今日はなんか甘い香りがする? ハッ!もしかして結愛に彼氏とか!?

「結愛はもしかして彼氏出来たとか!」

「残念でした。でもなんで？」

「シャンプールの匂い変わってたから」

「モモチお得意のやつだね」

結愛の言う通り、私は小さい頃から目や鼻が良く効くのだ。だから今回も結愛のシャンプールの違いに気付くことができた。

「へえ、そんなに鼻が良いんだね」

「もしかして目とかも良かったりするの？」

「あり？ひよつとしてモモチのお友達？」

結愛以外の人に初めて話しかけられた！えっと、どうしよう？会話ってどうやったら良いんだっけ？

「ああ、いきなりごめんね。私は八千代命、よろしくね」

「私は石川五恵、よろしくね源さん」

「わわ！み、源モモチです！みんなからはモモチって呼ばれてるからモモチで良いよ！」

「なら私はメイちゃんでもよろしく」グツ

メイちゃんと五恵ちゃん！見たか結愛！この私にも友達が出来たぞ！つてそんなに誇らしげに言うことでもないんだけどね。

キーンコーン

「チャイムだ、なら私戻るね」

「うん、じゃあね結愛！」

「ところでモモチ今日放課後暇？」

「え？う、うん、暇だけど……」

「なら私がバイトしてるお店でご飯でもどう？」

「ええ!?!いい、良いの？」

「良いも何も友達でしょ？」

ん、やっぱり友達って最高！

\*\*\*

そうして放課後。命ちゃんと五恵ちゃんのお誘いもあつて一緒にご飯を食べて帰る約束があるのだ。決して浮かれている訳ではない。

「それじゃあモモチ行こっか」

「うん！」

命ちゃんと五恵ちゃんの隣を歩いて帰る。渡り廊下から見える夕日も私は好きだ。

「あつ」

「.....」

「なに？モモちあの先輩気になるの？」

「そりや勿論！だってあの半蔵門雪先輩だよ！綺麗でカッコよくて頭も良くて運動も出来る。私の憧れのような存在だよ！」

「横にいる人って誰？」

「確か幼馴染って言ってた気がする」

「へっ!?先輩幼馴染なんかいたの!?!」

でも良く見れば凄い絵になるなあ。半蔵門先輩は綺麗だし横にいる幼馴染?の人も凄いかッコいいし……。もしかしてカップルとかなのかな？

「青葉初芽先輩も良い人だよ！」

「五恵ちゃんの憧れの人だもんね」

「そーなんだね」

「ともあれ早く行こう！」

それから命ちゃんに手を引いてもらって五恵ちゃんと共に駆け足気味に目的地へ向かった。

— Wasabi —

「Wasabi……こんなところ知らなかった」

「めっちゃ美味しいからね！」

「取り敢えず中に入ろう」

「五恵ちゃんの言う通り取り敢えず中に入ろう。あまりお店の外で話してるのも迷惑になるかもしれないしね。流石五恵ちゃんだね！」

「いらつしやいま……」ガタッ

「あ、あのー」

「ガールルルツ!!」

滅茶苦茶警戒されてるんですけど……。私何かしたのかなあ?というかこの制服空崎高校の一年生だよな?

「ごめんごめん、この子は相模楓」

「源モモです…… よろしくお願いします」

「…… よろしく」

相模さんに警戒されたまま店内へ。すると奥からもう一人これまた綺麗な店員さんがやってくる。今度は金髪で大人びた雰囲気の人だ。空崎には美人さんとか可愛い人多いのも魅力の一つだよ!

「命ちゃんのお友達?」

「まあそんな感じ、メイはドライカレーでいいや」

「じゃあ私はベーコンカレーで」

「じ、じゃあ私はハンバーグカレーで!」

それからしばらくしてから注文したカレーが到着。初めてだったけど驚くほど美味しかった！もしかしたら常連さんになっちゃうかも？

「それで、モモチのお話聞きたいな」

「私の話？」

「他に特技とかある？」

「んー、目が良かったり舌が良かったりかな？」

『舌が良かったり？』

見事にシンクロする命ちゃんと五恵ちゃん。まあでも普通に舌が良いって言うても分かりにくいかな。モノは実践、百聞は一見にしかずって言うよね！

「ちよつと失礼」ペロッ

「えっ！ちよつとモモチ!?!」

「うーん、もしかして寝不足？」



「あ、当たってる」

命ちゃんバイトするのは良いけどちゃんと寝ないとダメだよ。隠しても私にはバレレなんだからね!..... つて一人でなにしてんだ私。

「五恵ちゃんにもしてみて」

「うん」

「..... ぞ、どう?」

「ちよつと筋肉痛かな」

「モモち凄いい!」

えへへ、それほどでも。というかこの特技といふかなんといふか、使いどころあんまり無いんだよね。

「あ、命ちゃん五恵ちゃん聞いてよ!」

「ん、話してみよ」

「昨日お母さんと港で夜景見たら人が飛んできたの!」

「………… モモチ本気？」

「虫とかと間違えたんじゃない？」

やっぱりそうなのかな？お母さんも見えてなかったらしいし。何しろあんな夜遅い時間に人が飛んでる訳ないしなあ。

「もしかして!？」

「な、なに？」

「………… フライイングヒューマン？」

「………… ぶっ！あはははは!!」

結構真面目に考えたんだけどなあ。

「やっぱモモチ面白いね。これからも仲良くしてね」

「これは親愛の印ぜよ」

「なんで坂本龍馬風？」

命ちゃんにハグしてもらったのを相模さんに見られて余計に警戒されました。何で相模さんは相模さんで最初から私の事警戒してるのかなあ。

\*\*\*

「今日は楽しかったなあ」

あのあとはその場で二人とはお別れして解散。偶然帰り道で巡回してる歩さんと会ってアイスも買ってもらっちゃった。相変わらず歩さんは良い匂いするなあ。あの後もお仕事で巡回するって言ってたっけ。

「歩さん大丈夫かな？」

なんだか嫌な予感がする。またお父さんみたいに……歩さんまでそうなっちゃうのは嫌だよ。

「…………よし！」

歩さん扇町の方回るって言ってたっけな。

「お母さん寝てて良かった」

嫌な予感するだけで外出る理由にはならないもんね。それに自転車だから起きてる

とバレちゃう可能性もあつた訳だし。

「つと、着いた！」

「サツに見つかるなんてね」

「………… あつちだ」

声の聞こえた方へ急ぐ。

「これだからアンタ達との取引は嫌なんだよ」  
「くっ…………」

歩さんだ！それにもう一人捕まってるし…………。どうしようどうしよう、こんな時どうすれば良いんだっけ？取り敢えず警察に…………。

「さっさと片付けて逃げましょ」

ああもう！

カシャ！

「ああん？」

「写真撮りました！警察も呼んでいます！」

「まだ居たのか」

「私に任せなさい」

「ちよ！警察呼んでますっば！」

ひええ!!ゴツツイおばさんが全速力で追いかけてくるよ!!兎に角捕まらないように逃げなくちゃ!

「中々逃げ足早いじゃないのよ！」

「誰か助けて〜！」

ガシン！

「わあ！」

「写真は消滅♪」バキッ

私の携帯があ〜!!

「若い女の子なんて、海に沈めてやる！」

お父さん、お母さん！誰でもいい、誰か助けて！

ブンッ!!

「えっ?」

あれ? ロボットみたいなのに投げられたのに一向に海に落ちない?

「は、半蔵門先輩!」

というか何で半蔵門先輩が此処に?



「こんばんわ、良いねえ空崎の夜は♪」

「命ちゃんも!?!」

「軍事人形の密輸現場……ですね」

「きめるぞ」

え、なになに、先輩達が戦うの?これどういう状況なの?!

「ミツシヨンスター!」

それからはあっさりと密輸?してた人達が次々に倒されていった。先輩は刀使ってたし命ちゃんはクナイ使ってたし。五恵ちゃんなんかパンチで戦ってなかった?

「歩さん大丈夫ですか!?!」

「モモちゃん、助けてくれてありが……」パスッ

「え？」

「この数時間の出来事を忘れてもらうだけよ」

キイイイ!!

「まだ残ってたのね」

凄いスピードで車が走っていつちやった。それにしても分からないことだらけで頭  
こんがらがりそうだよ。

「追うわよ」

「え？ええええええ!!」

私これからどうなっちゃうの〜!?

|  
T  
o  
  
B  
e  
  
C  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
|

## SPYCE 2#邂逅

『今日の夜は動けるようにしておいて』

と言われてもなあ……。その後場所が書いてあるメールが一通きただけだしアイツの意図がさっぱり分からん。というか動けるようにして何するつもりなんだよ。稽古とかなら道場に來いって言ってくれれば良いのに。

「ま、取り敢えず行きますかね」

グズグズしててもしょうがない。これもいつもの事だし付き合ってやるか。

「あの〜」

「喋らないで下さい」

助けてくれたと思っただら相模さんに銃向けられてるんですけど……。今は車に乗ってさっきの人達の仲間を追ってるみたい。ってそんなに冷静に状況理解出来るほど人間出来てないよ〜。

「貴女の事は監視させてもらってたわ」

「か、監視？」

「出てきても良いわよ」

半蔵門先輩がそう言うのと、何故か私のポケットから一匹のカエルがピヨコンと出てきた。

「その子はカマリ。一応シノビとしての訓練を受けてます」

「シノビ？訓練？というかいつの間にも!?」

「それはメイが忍ばせといたよ」グッ

Wasabiでモモチをハグした時にね、と命ちゃんが続く。私全然気付かなかつたよ……。この子監視って事はずっとポケットの中に居たのかな？

「……………監視って事はあの独り言もですか!？」

「はい、カマリを通してバッチリと♪」

は、恥ずかしい！まさか当の本人である半蔵門先輩に聞かれてたなんて……………。

「……雪ちゃんちよつと」

「半蔵よ、何かあったの局」

「道の真ん中に人が立ってるんですけどどうします?」

身動きは取れないけど頭ぐらいなら動かしても良いよね?車のフロントガラスの向こうを見てみると確かに道路の真ん中に人が立ってた。って冷静に状況確認してる場合じゃないよね?このままだとあの人車で轢いちゃうんじや……

「……そのまま速度を落とさないで」

「ええ!?あの人轢いちゃって良いんですか!」

「大丈夫よ、だから絶対にスピードは落とさないで」

「まあ雪ちゃんがそうまでして言うのなら」

半蔵門先輩の言う通り、車はスピードを落とすことなく道路を一直線に走り抜ける。というか逆にスピード上がってる気がするけど……。

「当たりますよ!?本当に良いんですか!」

「貴女は黙ってて下さい」

「は、はい……………」

尚も止まることなく、かといつて進路を変える事もなく突き進む車。一向に半蔵門先輩は何も言ってくれないし他のみんなも半蔵門先輩の言う通りにしてるし。実はこの人達もヤバかったりするのかな…………。とか言ってる内にもうすぐ当たりそうなんだけど!?

「…………… 大丈夫よ」

「え?」

\*\*\*



「よし、安定で連絡ないな」

あれから数十分経ったのに関わらず一切連絡無しと。春とはいえどそろそろ肌寒くなってきたんだけど。相変わらず俺への対応が酷すぎませんかねあの人。

ブロロロロ

「お、やっと来たか」

まだまだ遠いが車のナンバープレートと車体を確認する。教えてもらったナンバーで車体もそれっぽいので間違いなさそうだ。言われてた時間と全然違うんだけどそれはもう許そう。

とか考えてる場合じゃないかもしれない。確認したは良いものの車が速度を落とすしてくれないのである。見た感じ全然スピード落ちてないしむしろ早くなってる気がするし。これ俺が轢かれる未来が数十秒後に訪れる気がするんだけど大丈夫？

ブロロロ!!

「ちよ、本気で轢く気か!？」

このままだとマジでお陀仏コースまっしぐらだ。流石にまだアイツのところに行くわけにはいかない。未だスピードを保ったままこちらへ向かって真っ直ぐ走る車。既の所で後方へ飛び移りお陀仏コースを回避。そのまま車体の上に乗っ落ちないようにバランスを保ちながら助手席の窓を2、3回ノックする。

「あら、大丈夫だった？」

「本気で轢く気かと思っただぞ」

「貴方なら大丈夫だったでしょう？」

大丈夫か大丈夫じゃないかです。そのような行動じゃないんだよなあ。俺があそこで足を引つ掛けて動けなかつたら普通の事故だからな。

「あの……先輩この人は？」

「とうかこの人さっきの道路の人!？」

「道路の人って覚え方酷いな」

「す、すみませんつい」

まああなたが間違えてないから強く言えないけど。場所言われてそこで待つてろと言われれば待つしかないだろう。それが例え道路のと真ん中だとしてもな。最初は全然意図すら掴めなかつたけど、今思い返せば多分最初からこうするつもりだったんだと思う。

「メイと初芽ならもう思い出したんじゃない？」

「……あー！思い出したさつくんだー！」

「さつくん？」

「そう呼ばれるの懐かしいな」

でもさつくんって呼んでたの命しかいなかったけどな。何かとあだ名をつけたがりな命が最初にあだ名をつけたのが俺の”さつくん”だったりする。

「師匠、この人は？」

「名前は絢辻咲斗、私や雪ちゃんと同世代のツキカゲメンバーだった人です。でも何で私や命ちゃんは忘れてたのでしょうか……」

「そこは後で説明するわ、取り敢えずアイツらを追うわよ。貴方にも手伝ってもらおうわ」「……」まで来たら手伝うよ、よく分からないけど一人睨んできてる子もいるし」

ピンク髪の子に銃を向けているのにも関わらず俺の事睨んできてる子いるし。まあさっきの情報だけじゃ信じてもらおうっていうのも無理あるかもしれないし。実力見せるのが一番手っ取り早いだろうからな。

そして初芽の開発した車の能力をフルに使って逃げていた敵を捕捉。上手く一本道への誘導を成功させ距離を縮めることにも成功。しかし中々しぶとく逃げているので強行手段……に出ようと思った矢先逃げていたトラックから1機だけ先ほどの口

ボットが出てくる。

「あれをお願い」

「りよーかい」

「大丈夫なんですか？私がやっても良いんですけど？」

「まあまあ楓も見れば分かるって！」

改めて車体の上に立ち雪から渡された刀を抜く。何もかも久し振りで上手くやれるか分からないけどやるしかないか。

「——熱く、鋭く」

一気にトラックの方へ飛び移り右腕のアームを振りかぶってきたのを躲す。そのままアームを伝って出来るだけロボットへ近づいていく。その途中でも片方のアームでの迎撃を刀を使いながら被害を最小限に抑えつつ最も効率的に無力化できる場所に向け進む。

「す、凄い」

「衰えてはいないようね」

大体この型式のロボットは頭付近に集中的に制御回路が積まれているはず。ならばそこを一点集中で攻撃するまでだ。

「ハッハッか！」

攻撃を躲し頭へ到着しそのど真ん中に向け刀を突き刺す。するとロボットは電源を落としたかのように動く事は無くなった。というかこの刀相変わらず切れ味抜群だな。

その後、ロボットは崩れ落ちその反動でトラックもバランスを保つ事が出来なくなりなし崩し的に動きを止める事となった。久し振りにしては上手くやれた方だと思われるけどな。

「モモ、覚えておいて。初めに自信が無いのは当たり前よ。積み上げた努力とその成果

が自信に繋がる。後は……一握りのスパイス」

「スパイス……」

「良い雰囲気のものいいんだけどこれ大丈夫？」

ロボット燃えてるし車燃えてるしで大変だと思っただけです。このままだと大爆発起こりかねないよ？良いの？空崎爆発しちゃうけど良いの？

「初芽」

「お任せあれ♪」

初芽が何やらリモコンらしき物をポチッと押すと、車からホースのようなものが伸びてくる。そして近くにあった消火栓にもう片方のホースを繋ぎ勢いよく水を噴射し徐々に鎮火していく。

「あ、凄く便利なのねこの車」

「はい、プロデューズby私ですから！」

みんなある意味全然変わってなくて安心するよ。ウチの門下生だけはちよっぴりサ  
ティストっぷりが強化されてるかもしれないけどな。

「ふわあ…… 眠い」

「朝からだらしらないわよ」

なんやかんやあつた日の翌日。あの後ピンク髪の子…… 確かモモって言ってたっ  
けな。あの子をツキカゲにスカウトするらしくWasabiの地下にあるツキカゲの  
基地に一度連れて行くらしい。俺も久しく入ってないからなんか楽しみだ。

「仕方ないだろ、昨日結局お前んちで遅くまで稽古してたんだから」



「これからまた復帰するんだから当然でしょう」

「言つとくけどあのメニューは異常だからな」

もしかしてあのメニューをそのまま弟子にやらせようとしているのだろうか。だとすれば鬼教官にも程がある。復帰直後の俺でも一応は元ツキカゲメンバーだ。前はこんな稽古を1日に数回こなしてた気もする。でも入りたての子に出来るような稽古でも無いからなあ。ホント師匠とは似ても似つかないな。

「久し振りに刀を握った感想はどう？」

「それを言うなら久し振りの実戦だな。今までも別に何もしてなかった訳じゃないし」

「あら、一人でこそこそ何をしてたのかしら」

「変な感じで言うなよ。というかお前も途中からはちよくちよく顔出してただろうが」  
「当たり前でしょう」

実戦という意味合いでは確かに久し振りだった。たかがロボット一体なら実戦と言えるかどうかは少し分らないが。

「朝ご飯は食べてきたの？」

「起きたばっかだから食べてないな」

「朝ご飯食べないと動けないわよ」

「別に今日体育無いんだし良いだろ」

「そういう問題じゃないのよ」

雪は呆れた顔をしつつ、おそらく炊き立てであろう白ご飯をよそい2人程が使えるテーブルへと置く。これは食べるという意味で合ってるよな？これで食べようとして” 貴方の分じゃないわよ” とか言われたら怖い。ツキカゲーのサディスト雪さんチヨー怖い。

「…………… 食べないの？」

「あ、やっぱ俺の分？」

「私はもう食べてるから食べなさい」

「なら遠慮なく…………… いただきまーす」

その後、味噌汁やら焼き魚やらなんやらを沢山持つてきたので取り敢えず完食してお

いた。この量を朝ご飯で食べたのも久し振りな気がする。逆にお腹いっぱい動けそうにない。

「そーいや結局あのモモって子を弟子に取るのか？」

「今のところそーいう予定よ」

「ほーん」

コイツがとうとう弟子をとる時代になったと思うと何処か複雑な気持ちになってしまふ。不安でもなく焦りでもない感情が心の中をグルグルと駆け巡る感覚に陥ってしまふ。

「あの子は強くなるわ」

「何を根拠にそう思うんだよ」

「……………勘よ」

「君はもつと強くなれる」

「何でそんな事が言えるんだよ」

「女の勘ってやつかな♪」

「…… やっぱアイツの弟子だな」

「何か言った？」

「いんや何も、取り敢えず学校行くか」

その気持ちの答えを未だ出せないまま、ずっと止まっていた刻が動き出そうとしていた。

— T o B e C o n t i n u e d —

## SPYCE 3 #記憶

学校の準備も終わり空崎高校へ向かう。雪の道場から二人並んで歩いて俺達の通う高校へと到着。登校途中では何かと見られることの多い雪を隣に連れているお陰か俺までチラチラと見られる始末。そりゃ雪はカッコいいと可愛いを兼ね備えてるから人気なのは分かるけど、隣の俺にまで期待してもらっても困る。

「おはよう雪ちゃん」

「おはよう初芽」

「咲斗君もおはよう」

「初芽は変わらないんだな」

前と変わらず接してくれる事に少し驚きを隠せない。驚きというか何というか、嬉し

さが勝つてるといふ方が正しいのだろうか。それとも俺の気にしすぎなのだろうか。どちらにせよ初芽の完全友愛主義は何も変わってなくて安心する。

「咲も挨拶くらいいしなさい」

「おはよーさん」

「おはよーさつくくん！」

「うおっ！……命かよ、ビックリさせんな」

初芽におはようと言ったら命からおはようが返ってきました。いきなり後ろから中々の音量でおはようと言われるとビックリします。これテストに出るらしいから覚えておくように。

「……おはようございます」

「おはよう、確か楓ちゃんだっけ？」

「そう！メイの弟子の楓だよ！可愛いっしょ？」

「ちよ、師匠何言ってるんですか!？」

「えー、いーじゃん別に！」

命が来ると一気に会話がうるさくなった気がする。雪とかさつきから一言も話していないし。今も命と初芽が話してるだけだし。ずっと前もこんな感じだった気もするけどな。まああの時とは面子が全然違うけど。

「メイ、2年生はあっちでしょう」

「はい、じゃあまた放課後にねー!」

「んなら俺らも行くか」

「はい♪」

遅くなって担任に叱られるのも嫌なので少し急ぎ足で教室へ向かう。雪や初芽とは同じクラスで席も近い為なんだかずっと一緒にいる気分だけどな。



\*\*\*

キーンコーンカーンコーン

「やっと終わったあ〜！」

本日最後の授業もチャイムの音でやっと終わりを告げる。学生にとってチャイムとは初まりであり終わりであるのだ。俺レベルになるとその違いが分かってくる。主に朝一時間目のチャイムとさっきの6時間目の終了のチャイムだな。退屈な数学の授業が終わって大満足である。

「Wasabiに行くわよ、初芽も呼んで」

「へいへーい。初芽〜、帰るぞ〜」

だらしなく間延びした声で前の方に提出物を出しに行っている初芽に声を掛ける。

すると初芽からはハッキリとした返事が返ってきた。周りのクラスメイトは少し不思議、というか多分動揺しているんだと思うけどまあ良いや。そりゃあ昨日まで全然話してなかったのに急に名前呼びだからな。変に勘繰りする奴がいないと良いけど。

「それで今日の予定は？」

「モモの受け入れと貴方についての説明ね」

「あれ？でも試験受けないと入れないんじゃないかなかったっけ？」

「勿論試験はするわ。今のところメイに相手をしてもらおうと思ってる」

俺がいない間に制度云々が変わったのかと思っただぞ。まあ俺はツキカゲ入るのに試験も何も受けてないんだけどな。別にツキカゲの中じゃ誰の師匠でもないし、ましてや誰かの弟子になる事もないし。

「因みに初芽は俺の事どこまで思い出してる？」

「んー、同じツキカゲメンバーだったとかそんなところですね」

「…………… 流石は初芽と言ったところかしら」

「え？私ですか？」

「まあそこらへんも今日説明してくれるらしいぞ」

あらやだ、説明して思い出したら怒られそうで怖いわ。今のうちに保険でもかけとこうかしら。

「つと、そんな事言ってる内に到着だな」

「ささつと入るわよ」

「師匠、お邪魔しまゝす♪」

” Wasabi ” と書かれている看板の下から三人順番に入っていく。久しく来れていなかったのだが内装とか全然変わってねえのな。多数の人が置物だと思ってるモノミもいるし懐かしいなあ。

「あら、いらつしやいみんな」

「そーいやカトリーナさんって俺の事思い出してんの？」

「今からそれを確かめるのよ」

「雪ちゃん?」

命や初芽は昨日の時点で簡単な情報は思い出してるみたいだから良いけど、Wasabiの店主であるカトリーナさんはどうなんだろうか。これで思い出してなかったらただの不審者なだけだ。

「この人に見覚えはありますか?」バシッ

「つとと、えーと……どうも?」

「……も、もしかして咲斗君?」

「今思い出しました?」

「ええ、でも何で忘れていたのかしら……」

「そこはこれから説明するのでカトリーナさんも一緒に来て下さい」

こうして実際に経験してみるとマジで初芽は凄いなって実感するな。俺なんて最後まで説明してもらっても理解出来なかったからなあ。これからの説明でも理解出来るかどうか分かんけど。

くツキカゲ基地く

「おおく」

「何驚いてるのよ」

「いや、やっぱツキカゲ凄いなと思って」

基地といい組織のデカさといい改めて凄いと思う。何処から資金が出ているのかは謎だけど。とかクツソ久し振りに入る時に必要な合言葉の”オリジナルカレー、はちみつ抜き、ガラムマサラマシマシ”を言った。最初思い出せなくて超焦ったし、何ならちよつと言いい間違えてたからね。記憶力無くてごめんなさい。

「どうやら先客がいるようね」

「先客？」

エレベーターの動きが止まり、大きな扉が音を立てながら徐々に開いていく。そこには雪の言う通り、命と命の弟子である楓ちゃん、そして初芽の弟子である五恵ちゃんが揃っていた。

「ユツキー達遅いよ!」

「貴女達が早すぎるのよ」

「モモちゃんは?」

「もう少しで着くと思います」

どうやら楓ちゃん伝いでWasabiに来る事は既に伝えてあるらしく、その際の合言葉も教えてある様子。代々自分の弟子を見つけた時はこういう風な直感?みたいなところによるものが多いって聞いてたけど本当っぽいな。そういう俺もツキカゲにスカウトされた時はアイツのその場の独断だったらしいし。

「……来たようね」

雪の言葉通り、俺達が先程ここへ来る為に乗っていたエレベーターが動き出し降りてきていた。案内はカトリーナさんに一任してるらしいし、カマリやモノミ達を店に置いていくから安心だな。

パンツ！

「ようこそモモチー！」

「うわっ！び、ビックリした〜……」

「メイ、まだ決まったわけではないのよ」

「まあまあ、こういうのは雰囲気的大事だよユツキー！」

連れてこられたモモチちゃんとはかく、一緒にいた俺達まで少し驚いてしまった。何にせよいきなりパーティーグッズでもてなすのはやめて頂きたい。何処に隠し持っていたのか不明だがもう一発あるらしいので流石に止めておく。

「じゃあモモの案内は楓と五恵に任せるわ」

「了解しました」

「じゃあモモチ行こっか」

「う、うん！」

命がパーティーグッズの後始末をしている間に二人はモモチちゃんを連れて行ってしまった。その場に残ったのは俺がかってツキカゲメンバーだった頃の同期ばかり。

「んでここからどーすんの？」

「この面子を見て分からないのかしら」

「いや、分かるっちゃ分かるけどさ」

「取り敢えず軍議話せる場所の社に行きましようか」

楓ちゃんや五恵ちゃん達に万が一でも聞かれるわけにはいかない為、基地にある軍議の社という場所へ移動。基本的には作戦の打ち合わせをしたりするところだ。

「よつと…… それでどこから話すんだ？」

「はいはい！まずメイから質問良い？」



「構わないわ」

「さつくんとユツキーって付き合ってたんだっけ？」

『付き合つてない（わ）』

「おおー、そこは息ピッタリなんだね」

何故その質問を一番初めにしたのかは謎だが良しとしよう。そりやあ外野から見れば雪とは比較的一緒にいる時間多いし、まず男でツキカゲに入ったのなんか俺が歴代で初めてだったし。かと言って付き合う云々の思考に辿り着くのが何とも命らしい。

「はあ…… まずは咲の事について話しましょうか」

「一番疑問なのはどうして忘れていたかよね……」

「しかも咲斗君に関してのみ、というところも不思議です」

「答えを簡潔に説明すると、貴女達は咲について忘れていたのではないわ」

雪がそう言うのと三人は首をかしげて分からない、といった風な様子で雪を見つめる。そう、雪の言う通り命達は俺についてただ単に忘れていたという訳ではないのだ。

「となると作画的に、そして人為的な何かがあったという事ですか？」

「だったとしてもどういう方法なのかさっぱりね」

「この案を考えつき生み出したのは初芽自身なのよ」

「私が……ですか？」

「初さんが？でもどういいう事？」

多分あの時初芽が居なかったら俺はもうツキカゲに戻る事は無かったと思う。俺の願いを初芽が叶えてくれたからな。身内最良無しで本当に初芽は凄いなと思う

「今から説明するから良く聞いておいて」

「分かった」

「…… 2年前のあの件は覚えてるわよね」

「2年前…… 衛星ジャックの事ですね」

2年前の衛星ジャック。この言葉の意味する事、それは俺達のたった一人の仲間……そして俺の大切な人を失ってしまった日。

「あの事件があった翌週、私達が薬の製造工場を潰しに行った事を覚えてる？」

「確かユツキーが主犯格を取り押さえて終わったやつだよな？」

「残念ながら取り押さえたのは私じゃないわ」

「ええ!?!じゃあ誰なの？」

「俺だよ。そこから辺まで誤魔化せてるのか」

俺の近くで一緒に任務してた命がこれなんだからカトリーナさんや初芽が覚えてるわけが無い。ここまできると副作用とかそこから辺を心配するレベルだなマジで。

「誤魔化せてるってどういう事なの？」

「今までの記憶の違いや忘れていた事に直結する理由は一つ。それは初芽が開発した記憶操作弾によるものよ」

「私が開発した記憶操作弾？」

「ええ、私達が普段使っている銃には記憶を消したり置き換えたりするものがあるでしょう？あれの強化版だとも思ってもらえれば良いわ」

ツキカゲのスパイが使用する銃にはそれぞれ特殊な弾が装填される。それを状況に

よって使い分けていくのが基本的な戦い方の一つでもあるのだ。

「ということはさつくんの記憶を私達の中から消したってこと？」

「正確には記憶に蓋をしたという表現になるわね」

「完全に咲斗君の記憶を消したのではなく何か置き換えたという事でしょうか」

「初芽なら原理が分かるんじゃないかしら」

「人間は記憶について大まかに分けると二つの部位を使用していることが分かっています。それは海馬という部位と大脳皮質という部位になります。細かい話をすれば長くなるので省きますが……」

俺には最後までさっぱりだったのだが初芽には理解出来ているらしい。その部分の記憶についても俺に繋がる情報だから蓋してたはずなんだけどな。もう初芽やカトリーナさんは思い出してきているみたいだし。

「咲に関する記憶だけを書き換えることが出来る様に初芽が開発したのが特殊な記憶操作弾よ。そして、その記憶操作弾をあの日夜の夜に私以外に撃ち込んだの」

「どうしてユツキーには撃たなかったの？」

「それは俺の判断だ。雪には俺が抜けてる間にツキカゲの情報だけ流してもらってたからな」

「……………何故咲斗君はツキカゲを抜けたの？」

「……………アイツを……………長穂を失ってからは生きた心地がしなかった」

2年前の衛星ジャックの事件でモウリヨウと戦い、その結果長穂を失ってしまったあの日。俺は目の前で大切な人が死にゆくのを黙って見ているしかなかった。あの時助けに行けていれば、俺と一緒に戦っていれば……………そんな後悔ばかりが押し寄せてきた。

「だから初芽にみんなから俺の記憶を消してくれて頼んだんだ。俺がツキカゲを抜けても誰も気付かないようにな」

「そう言えばさつくんと長穂の姉御は……………」

「あれは私のミスよ。あの時まだ私が未熟だったから師匠は……………」

「それは違うぞ雪。長穂はあの時既にお前の事を一人前のスパイだと認めてた。お前が弟子だったから安心して背中を預けられてたんだ」

いつもいつも雪に甘えてたり世話してもらってたりしたアイツが真剣な表情して言ったんだ。”雪は私より良いスパイになる”そう言つて楽しそうに話す長穂を側で見てるのが何より幸せだったのに。その幸せはふとした瞬間に掌から落ちていつてしまった。

「でも、私達が咲斗君の記憶を取り戻せたのは何故？」

「それは記憶を取り戻すトリガーが師匠と弟子が全員揃う時だからでしょう」

「そんな事が可能なの？」

「人は記憶を何かに関連付けて覚える事が多いらしく、それを利用してるので俺と親しかったあの時の面子が揃ったから記憶が戻ったんでしょね」

もうこのレベルになると正直意味が分からなくなってくるので割愛。俺と同じ事をする奴が出ないように、その部分に関しては完全に消し去ってるから初芽にも分からないだろう。

「じゃあなんでまた戻つてこようと思つたの？」

「雪が弟子を取るみたいだから良いタイミングだと思つてな」

「貴女達には嘘を付いてるみたいになってしまつて申し訳ないと思つてるわ」  
「いえいえ、私は咲斗君が戻つてきてくれて嬉しいです」

初芽のこの優しさに今まで何度か救われた。命にだつて幾度となく励まされたりしたし頭が上がらないのが本音である。前みたいに稽古見てやるとかしか出来ないけど出来るだけは協力しよう。

「これからはツキカゲとしてまた任務に就くの？」

「咲には主にメンバーの稽古と任務の補助をしてもらう予定よ」

「ビシバシいくから覚悟しとけよ」

一通りの話が終わったタイミングで案内が終わつた三人が戻ってくる。そこから三人にも事情を説明して何とか納得してもらつた。楓ちゃんとかには未だに滅茶苦茶警戒されてるけど。

「これで今日は終わりよ」

「それじゃあ帰りますかね〜」

「何言ってるのよ、咲とモモはウチで稽古よ」

「……マジ？」

「大マジよ」

これから少しの間は俺が稽古するというよりは稽古してもらおう事になりそうな予感だなこりゃ……。



## SPYCE 4 # 絢辻流

皆さんは「ゾーン」という言葉をご存知だろうか。

良くトップアスリート等がゾーンに入って無双しましたとかニュースで聞くが、そもそもゾーンとは何か一般の人には分かり辛いところがあるだろう。簡単に説明するとすれば、集中力が極限まで高められた状態であらゆる感覚が研ぎ澄まされ、色々な活動や動作に没頭することが出来る特殊な現象って感じだな。

「……ハッ!!」スパッ

周りの音や景色が排除されてクリーンな視界になり、自分がしていることにのみ意識を向ける事が出来るのでパフォーマンスの向上にも繋がる。一時的ではあるが疲れを感じにくくなる効果も見られるし、イメージ通りに進むと高揚感なんかも味わえたりして良い事尽くしだ。

「んゝ…… やっぱまだ浅いか」

「朝早くから型の練習？」

「ん？ おお、雪か。まあ軽くな」

ツキカゲに復帰するんでウチの道場で朝一の運動がてら刀振ってたら雪のゴッ登場。ウチは古くから空崎に存在する「絢辻流」という道場であり、入ってきた雪はウチの門下生だったりもする。勿論、他にも門下生や生徒は沢山いるし何なら俺が直接稽古してる人達もわんさかいる。今の道場の師範は俺の両親。二人共スゲー強いから門下生の

人達は尊敬してゐる部分もあり、稽古の時はビビってる時もあるくらいだ。そういう俺も小さい頃からゴリゴリに鍛え上げられたからな。

「すぐ近くまで来てたのに気付かなかつたのね」

「マジか、やっぱり何か足りないのか？」

「私から見れば綺麗な仕上がりだったわよ」

「踏み込みか？それとも刀を抜く時のスピード？いや、そもそもゾーンに入りきれてなかつた説も……」ブツブツ

「全く聞いてないわね」

雪の接近に気付かなかつたとなると、ゾーンには大方入る事が出来ていたと思う。まあそれも最近になって漸く感覚が掴めてきたレベルだ。父さんやじいちゃんのようにスツと自然な形で入れるには、まだまだ鍛錬が足りないのだろう。

「咲、そろそろ準備しないと遅れるわよ」

「…… おお、もうそんな時間か。ちょっと待っててな」

兎も角、早いところ完成させないと。感覚が鈍ったら戻すのに倍以上の時間が掛かっちゃう。それに手こずってたらアイツに笑われそう。こういうのはアイツの方が才能あったしな。俺は地道に技術を磨いて経験を積んでいく他無いってわけだ。

〈空崎高校〉

「おはようございます雪ちゃん、咲斗君」

「おはよう初芽」

「おっす」

「宿題は終わらせてきましたか？」

シャワーで軽く汗を流して、時間もあまり無かったので食パンを齧りながら出発。ツキカゲ復帰ということとは、必然的にこれまでより女の子との接触が多くなるということ。これ即ち身だしなみを気をつける必要があるということ。見知った顔にガチで臭いとか言われるとメンタルが終わるからな。良い匂いにするシャンプーを使っておいで正解だったぜ。

「勿論よ」

「……さあどつちでしょう?」

「さては咲斗君やってませんね?」

「想像にお任せします」

「咲、ノート見せなさい」

いつの間にかノートが雪によって抜き取られていました。君はどこでそういった技術を習得するんですかね。ウチはそんなの教えてないんですけど。絢辻流のモットーは「正義の心」だったはず。隣のサデイストには正義の心がこれっぽっちも無いのだろうか。

「やべえ、そういえば先生に呼ばれてるんだったわ。悪いけど先に行ってるぞ！」

「咲斗君、逃げちやダメですよ！」

「悪いな初芽。バレたからには逃げの一択なんだ」

「さっくんおはよ！なになに、朝から追いかけてっこ？メイも混ぜてよ！」

「命!?というかいつの間に！じゃなくて！今は追いかけてっこしてる場合じゃないんだよ！」

結構全速力で走ってたつもりだったのに、気付けば隣に命が笑顔で挨拶しながら並走してました。まあコイツはスパイス抜きでも校舎間を飛び移れるくらい身体能力高いからな。

「じゃあメイが鬼ね！ほらほらく、早く逃げないとさっくん捕まえちゃうぞ！」

「だから違うんだってば！」

「おりよ？さてはさっくん衰えましたな？」

「言ったな!?なら俺のこと捕まえられたらジューズ奢ってやるよ！」バシユ

「そう言い残して俺は高く飛び上がり次々と校舎を駆け上がっていく。勿論、他の生徒が居ない場所だ。こんなところ見られたら誤魔化しが効かないからな。まあ訓練の環境で校舎を使ったこともあるし、構造は大体頭の中に入ってる。問題はどちらの方が頭が回るかって話だ。スピードで比べるなら命に軍配が上がる。それを補填する為に、俺は出来る限り頭を使って動かなければならないというわけだ。」

「到着く。さっくんもうお終い？」

「まあこの程度なら余裕か」

「あ、因みになんだけどユツキーから捕まえてって連絡あったから、割と本気で捕まえるよ」キャピ

「望むところだ」

それからは校舎を降りたり登ったりだけではなく、別の校舎へ移動したりフェイントを掛けてやり過ぎしたりすること数十分。そろそろタイムリミットの予鈴が鳴る時間だ。

流石に授業すつぽかして追いかけてこするわけにもいかないしな。そもそも授業すつぽかしたりなんかしたら、雪に何されるか分かったもんじゃない。

「ねえねえさつくくん！」

「何だよ急に」

「もしかしてこれってメイに稽古付けてくれてる？」

「んなアホな。スピードに限って言えば、命に教えることは何もねえよ」

「だからさ、もっと頭使って立ち回れる様に色々なシユミレーションしてくれてるんじゃないの？」

コイツは昔から変なところで鋭かったり頭が回ったりするんだった。それを戦闘面でも活かす事が出来れば……なんて思ったりすることも多々あった。ウチの道場で門下生に稽古付けてた時の癖なのか、やはり人の動きに関しては何の人も比べて何か感じる場所が多いのだ。それは気付きであつたり思い付きであつたり、はたまた発想の転換であつたりもする。



まあこんな俺でも、ウチのじいちゃんに言わせてみれば”まだまだ教える立場に無い”とのこと。身内鼻頂が一切無くて厳しすぎる事で有名なじいちゃんだが、教育熱心なのか師範の座を父さんと母さんに与えてからもちよくちよく道場には来ているのだ。なんやかんやで面倒見の良い誇れるじいちゃんです。

「それじゃあ、もうちつと頭使つて捕まえてみぞ」

「ん〜……メンドクサイからパス!!」 スッ

「ちよ、おい待て命。それは流石に卑怯だぞ」

徐に制服の胸ポケットからスパイスを取り出す命。スパイスとは何ぞや、という疑問があるかもしれないが説明すると長くなるので省く。簡単に言えばドーピングみたいなモンだな。そして、命はメンドクサイとの事でスパイスを使おうとしているらしい。雪や初芽にバレたら怒られるぞ。

「さっくん、覚悟ッ!!」

「怒られても知らないからな！」

命がスパイスを齧った瞬間、目の色が鮮明になり先程より威圧感が増したのを感じる。元からスピードで劣る命を相手にスパイスという超特大ハンデ。正直微塵も勝てる気がしない。もう大人しく捕まった方が良いのでは？

しかしながら、大人しく捕まってもスパイスまで使った命をゲンナリさせるだけだ。多分、コイツのことだから雪からの連絡なんて二の次三の次なのだろう。自分が楽しみたい気持ちが一番に決まってる。まあそれは俺も否定出来ないが。こうして命と鬼ごっこみたく遊んでると、忘れかけていた過去の記憶も蘇ってくるというものだ。今にして思えば、昔から命とは案外良く遊んでた気もするけどな。

ガチャ

「ただいま」

「お邪魔します」

「あら、雪ちゃんいらっしやい」

「おい母親、肝心な息子はスルーか」

時は過ぎて、現在雪と共に我が家へ帰宅。結局のところ、朝の命との鬼ごっこの勝者は雪&amp;命のペア。だってスパイス使った命から逃げるので精一杯なのに、まさか雪が先回りして待ち伏せしてるとは思わないだろう。命はドヤ顔で「これが連携プレイだよ!」と言ったが、後で聞いた限りでは、先回りの待ち伏せは雪個人の判断とのこと。命ってあんなに嘘が下手くそな奴だったっけな。

何故に雪が俺と一緒に帰ったのか、という疑問もあるだろう。実は朝の宿題すつぽか

しの罰として、一週間のハードトレーニングを言い渡されてしまったのだ。それであれば、せめて雪の道場ではなくウチでやろうと提案したところ、何とか説得に成功したので助かった。ウチなら母さんの相手で手一杯だろう。母さんも母さんだが、昔から雪に關しては親バカというか何というか甘えさせたがりなのだ。そのお陰か分からないが、実の子供である俺の扱いがちよっぴり雑なのが解せん。

「母さん、伝えた通り道場使わせてもらうな」

「構わないわよ。まあお父さんもいるけどね」

「父さんも稽古で忙しいだろうし、別に気にしないで大丈夫そうだな」

「すみません御母様、一週間ほど咲をお借りします」

「いえいえ。一週間と言わず一生貰って欲しいくらいよ」

「俺のメンタルと身体が持ちそうにないからやめてくれ」

何かと俺にはサデイスティックな一面を見せる雪。三人で道場で稽古してた時の雪のドSっぷりは今でも忘れられない。俺もアイツもそれが嫌で抜け出した事があるく

らいだからな。まあ結局抜け出せなくて仕方なく付き合ってたんだけどな。

「んで、今日のメニューは？」

「特に考えてはいないわね」

「だったら刀の練習で良いか？」

「良いわよ。せっかくだし私に稽古つけて貰おうかしら」

ウチの道場について詳しく説明すると、これまたキリが無いので要所要所を押さえながら説明するでしょう。

ウチは古くから空崎に存在する歴史ある剣術の道場であり、俺の苗字でもある”絢辻”をそのまま名前にした”絢辻流”という流派らしい。何でもツキカゲと同じく戦国時代からあるらしく、現代では珍しい真剣による仕合形式を取る、言わばガチの剣術道場なのだ。

「咲は何の練習をするの」

「取り敢えずいつものかな」

「じゃあ重り持つてくるわね」

「さんきゅー」

そして雪の武術道場との関係だが、まだ歴史的に言えば雪の武術道場の方が浅いが昔から道場間で仲が良い事で有名だったらしい。武術の半蔵門・剣術の絢辻、だなんて言われてた時期もあるとかないか。かく言う俺も、武術道場にはお世話になっていたしお互い様って感じだな。絢辻の道場の影響もあつてか、武術道場ながら雪は竹刀を使つての稽古を良く行っている。因みにプチ情報だが、ウチの絢辻流の真髄は”相手の動きを見切る”事にあるらしく、真剣での仕合形式と言つたが別に攻撃的なスタイルでは無いのでご安心を。

「はい、咲はこれぐらい余裕よね？」

「ちよい待ち。お前何kgの重り持ってきてんだよ」

「確か10kgだったかしら」

「とぼけるの下手くそかよ。どう見ても1箇所10kgだろコレ」

こんなの付けて刀振つてれば数分で筋肉痛になるぞ。普通に動くだけでもキツいの  
に、やはり雪の俺に対するSっぷりはまだまだ健在の様子。とかふざけてる間にも雪は  
着々と準備を終えて刀を振っていた。え、マジでコレ付けて刀を振れと？

「おや、久しぶりだね雪ちゃん」

「ご無沙汰しております」

「咲斗もお帰り」

「ただいま。父さん稽古は終わったのか？」

「休憩中だからちよつと覗きに來たんだ」

道着を半分脱ぎながら、暑そうにこちらにやって來たのが俺の父さん。この道場の師

範であり、現在でも多くの門下生に稽古を付けている実力者。父さんが絢辻蓮、母さんが絢辻双葉という名前。そして俺の名前である咲斗の由来は簡単。両親の名前が花に關係していることから、才能やら個性やらが咲き誇りますようにという願いの元、咲斗” という名前になったらしい。

「今は稽古中？ だったら邪魔して悪かったね」

「いえ、まだ始めたばかりだったので」

「そう言えば咲斗、さつき双葉から連絡があったぞ」

「母さんから？」

「夕飯に雪ちゃん誘っておいてね☆、だってさ」

そこに雪がいるんだから俺じゃなくて直接言えば良いのに。というかもう聞こえてるだろ。まあ元から夕飯には誘うつもりだったから良いけどさ。コイツ遠慮して稽古終わったらすぐ帰る支度するからな。釘を刺す意味でも先に誘つという正解かもな。



「んで、どーするよ」

「私もご一緒して宜しいのでしょうか？」

「勿論。そうしてくれると双葉や咲斗も喜ぶよ」

「まあ母さんいつも作り過ぎるからな。正直、手伝ってくれるとありがたい」

そうして雪も夕飯を共にすることが決定し、それならば稽古をもっと頑張りましょうとの事で中断していたのを再開。おおよそ雪が付いている倍の重りを付けて刀を素振りする。俺達が素振りに使用しているのは真剣ではなく模造刀。姿形は真剣そっくりだが、肝心な切れ味は木刀と似たり寄ったりな感じだな。稽古と言えど間違えば重大な怪我を負ってしまう可能性もある。雪とか俺レベルになるとあんまり心配要らないのが本音だけどね。まあウチではそういうルールになってるから仕方ない。

「咲、ちよつと良いかしら」

「何だよ稽古中に」

「私にも貴方の技を教えてくれないかしら」

「別に構わんが、父さん達にどう説明するかだな」

現状この道場で師範として教えている父さんや母さんは良いとしても、俺が果たして雪に技の伝授をしても良いものなのだろうか。まあ幼い頃から鍛え上げられてるし、何なら既に門下生もチラホラいるぐらいだから大丈夫だと思うけど。というか雪は俺が担当の門下生なんだけどな。しかしながら、技の伝授となると少し話は変わってくる。基本的には刀の扱い方や仕合形式での動きの実践、相手の動きを見切る為の知識の勉強等しか教えてもらえないからな。

「何でいきなり技とか言い出すんだよ」

「私も師匠としてパワーアップが必要と感じたのよ」

「何度も言ってるが、お前は既に俺の門下生の域を超えてるんだからな。この意味が分かってるのか？」

「それでもよ」

「まったく、強引なのも昔から変わんねえか」

本音を言えば、この道場に通う門下生の中で1、2を争うレベルで強いのが雪だったりする。それもそのはず、雪は武道道場の跡取りでありながら絢辻の道場にも足繁く通っているのだ。そんな奴が弱いわけがない。

「咲が今朝やつてた型は？」

「駄目だ。あの技はお前には早過ぎる」

「だったら咲が教えられる範囲の技で充分よ」

「んならアレしかねえな」

取り敢えず話しながら行っていた素振りを止めて、足や腕に付けている重りも取り除いていく。そして汗をタオルで一度拭いて、再度模造刀を持って雪と対面する。

「今から教えるのは絢辻流の基本の型だ」

「ええ、分かったわ」

「その前に軽くおさらいだな。絢辻流の真髄とは」

「相手の動きを見切ること」

「正解。それが一であり全だ。だから、基本に忠実にかこの技のコツだぞ」

俺が今から教えるのは先程も言った通り基本の型。父さんや母さんも門下生に教える際は、まずはこの技を最初に教えるって言ってたしな。雪なら2、3日もあれば習得出来るし、なんなら実戦でも応用で使いこなすことが出来るだろう。

「まずは腰を浅く落とす。そんなもって左脇を締めて、なるべく顔に近づくように刀を構える」

「こんな感じかしら」スッ

「刀は平行に。最後に軸足ではない方の足の踵は浮かせる」

「それはどうして？」

「軸足を基準に動く必要があるからな。その動作をやり易くする為に、より早く反応する為に踵を浮かせてるんだよ」

聞いて驚くなかれ、俺がじいちゃんにこの技を伝授してもらったのは小学生の頃だ。まあ伝授って言っても身体に叩き込まれただけなんだよな。

「この後はどうするの?」

「終わりだよ」

「…… 本当に?」

「嘘ついてどうするんだよ」

確かに雪の言いたい事も分かる。俺だつて最初に教えられた時は意味不明だったからな。だがしかし、最初に伝えた通りこの技は絢辻流の基本であり全てだ。そこを良く考えてみると、この技の意味や使い方も自然と理解出来るつてもんだ。

「まあ口で説明するより物は試してことだ。ほい、適当に攻撃してみそ」

「手加減無しで良いのかしら?」

「あややだ怖いわ雪ちゃん。…… んまあ冗談は置いて。別に良いけど、俺の動きも良く見とけよ」

雪が刀を構えて様子を伺う中、俺は先程教えた通りの構えを取って雪に合わせて距離を調整する。すると雪は少し驚いた様な表情を見せるが、すぐにそれは元へ戻り一瞬にして距離を詰めてくる。

「はあ!!」ブンツ

「速さは悪くない。…… だけど残念だ!」キンツ

「なっ!?!」スツ

距離を詰めて刀を振りかざす雪に対して、こちらも一步前へ踏み出すことで相手の感覚を少し狂わせる。そして、懐へ潜り込み雪の刀を弾きながら自らの刀を雪の首元へ突きつける。流石の雪も、刀を畳の上に落として”参りました”の一言を告げる。

「対面してみた感想は如何かな」

「驚いたわ。こちらの攻め入る隙が見当たらないし、漸く見つけて距離を詰めても勝てる気がしなかった」

「最初に伝えた通り、この技は絢辻流の基本であり全てに通じるからな。極めればこれだけで複数人を相手にしても余裕なくらいだ」

「咲斗はいつから使えるのかしら」

「中学の頃には大人相手に何連勝出来るか試してた気はする」

「貴方が規格外なのは知ってるのよ」

まあ極めれば、からの部分はそのままの意味だから注意するように。門下生に教えて数週間で完成しましたとか言つてポロ負け、なんてケースはザラにあつたし俺でも完璧に使いこなすのは難しいレベルだ。それもそのはず。一にして全と言つた通り相手の動き次第で幾千幾万の対処を強いられるからな。

「名前は確か……」

”孟琥琉戟もうこりゆうげきのかまえの構え”

「それぞれ。って、母さんいつの間に」

「夕飯の支度出来たから呼びに来たのよ」

ふと道場の時計を確認すると、既に20時を回ろうとしている。いかんせん稽古中は

時間気にしなくなるからな。気付けば夕飯の時間過ぎてた事も多々。こうして母さんが呼びに来てくれるのは素直にありがたい。

「んじや今日はここら辺にしとくか」

「御母様、本当に私もご一緒しても宜しいのでしょうか？」

「勿論よ。毎日でもウチに来てても良いのよ」

「またそんなアホな事を。雪、さっさと片付けて飯にするぞ」

「ええ」

後ろの方で「素直じゃないんだから」とか聞こえた気がするが放っておこう。雪も雪で気を使い過ぎなところはあるものの、元はと言えばウチの母さんが原因だ。こうして俺が助け舟を出さなければ、きつといつまで経つても夕飯にならないだろうからな。

く 帰り道く



「御母様にはお礼を言っておいて」

「あいよ」

「それと道場での稽古の件も」

「はいはい」

「本当に分かつてるのかしら」ギョツ

「痛い痛い離してお願いしまふ」

夕飯を4人でワイワイ話しながら楽しみ、片付けくらいはやりますとの事で雪と俺の二人で片付けを担当した。何故俺が巻き込まれているのかは言うまでもない。そして現在雪を家まで送っている最中。母さんには「夜道をこんな可愛い子一人で歩かせるなんて男じゃない」とまで言われてしまったので仕方なく。雪の場合、不審者に襲われたとしても逆に撃退してしまうので護衛の必要性は皆無だと思いが。

「そんで、あの技はどのくらいで覚えられそうなんだ」

「まだまだだね。毎日練習はするけれど、そう簡単なものでもないでしょう?」

「そりや簡単ではねえな。でもお前なら何とかなるさ」

「また適当に言ってるわね」

「お前の事を信頼してるって言ってる欲しいね」

まあ正直な話、あの技を完璧に使いこなせるのなんて師範レベルの話になってくる。ゆつくりと考えながら、自分なりに覚えていくのが一番無難だろう。判断力に優れる雪の場合、もしかすると俺より技の習得が早いかもしれない。そもそも戦闘のセンスに関しては雪の方が上だと思うし、なんなら戦術面でも負けてる気がするの俺だけだろうか。

「そういえば、最近妙な噂があるのは知ってるのかしら」

「妙な噂？」

「前に潰した組織から派生して出来た小規模なテロ組織が、何やら悪事を働いてるらしいのよ」

「そりや良くないな」

「だから任務が近いかもしれないわ」

「でも源さんだっけ？雪の弟子候補の子はどうするつもりなんだ」

流石にスパルタ大好き雪でも、まだまだ鍛えてない弟子候補をいきなり任務に連れて行くのは無理がある。弟子の責任は師匠の責任。弟子の危険は師匠の危険。つまり、弟子と師匠は二人で一つ。わざわざそんな危険な真似をするとは思えない。

「モモにはまだ早すぎる。そこで咲を臨時メンバーに加えようと思ってるの」

「まあ妥当な判断だな。上の方はそれでOK出たのか？」

「財閥からは何も言われなかったわ。咲のツキカゲ復帰に関しても特に言及されなかったし、今のところは放っておいてもいいと思うけど」

「まあその辺りは俺が調べておくよ。これからは弟子の稽古やら何やらで忙しくなるだろうし、お前には負担かけさせないようにする」

雪にはモモちゃんの稽古を精一杯頑張つて欲しい。それで俺に対する稽古の時間が減るなら尚更だ。まあ雪から皆にも稽古付けて欲しいって頼まれてるから、実際のところ俺も忙しくなるんだけどな。

「その前に約束」

「ん？」

「一人で無理しないこと。咲は困ってる時ほど他人に頼ろうとしない癖があるから」

「はいよ。お前も気負いすぎないようにな」

出された右手は小指のみが立っており、これは所謂指切りというやつだろう。約束破ると針千本飲まされるとかいう、古くから存在するらしい一つの誓いの様なものだ。

「……………何か懐かしいな」

「……………咲？」

「んや、何でもない。遅くなると母さんが怒るから帰るぞ」

ふと蘇るあの頃の記憶。目を閉じればすぐそこに浮かぶ景色は、今となってはもう取り戻すことの出来ない日常。

『はい、約束』

『…… 任務中にいきなりどうした』

『咲はいつつも一人で無理するから、お姉さんとお約束するの』

『何の約束するつもりなんだ』

『ん？それは帰ってからのお楽しみ！』

『何だソレ。んまあ取り敢えず、この任務頑張りますかね』

今度こそ失わない様に、今度こそ守り切れる様に。そう胸に誓って、雪と静かに二人目を合わせて約束を交わした。